別紙２

自ら学び続ける教職員研修支援事業　活動報告書

グループ(学校名)	岐阜県立飛騨高山高等学校
テーマ	STEAM 教育の実践を通じた、教師のエンパシー（共感力）醸成と協働的な学びの場の創造

取組のポイント・成果

〇７月２９日【生成 AI に関する夏季公開学習会（文部科学省主催）】参加
・生成 AI パイロット校実践紹介（パネルディスカッション）
・生成 AI の動向（基調講演）東京大学　松尾　豊教授

〇８月５日　【金沢工業大学公開講座受講】
・『高校教育における生成 AI の活用法』ー校務、探究学習で使えるﾌﾟﾛﾝﾌﾟﾄｴﾝｼﾞﾆｱﾘﾝｸﾞｰ
・『データ分析と生成 AI を活用した「地域の社会課題」解決型探究学習』

〇１０月３日【学校訪問】福井県立武生高等学校
・授業参加（２年普通科「課題研究Ⅰ」）（１年普通科「課題研究基礎」）
・研究討議
①探究的な学びと大学での学問接続
②将来のキャリア形成につながるカリキュラム設計
③自発的に授業改善に取り組む教員風土の醸成
④評価モデレーション
⑤授業改善プロジェクトチーム（PT）の活動

〇１０月１４日、１０月２３日
【教科横断型研究授業】英語コミュニケーションⅠ×化学基礎（太陽光発電と共有結合）
【研究討議】複数教科（英語科と理科科）教員での授業検証と課題発見

〇１２月５日、１２月１１日
【教科横断型研究授業】音楽×数学×英語（ロックで学ぶ拍とリズムの違い）
【研究討議】楽しさと学びの融合をどのように実現するかについて

〇１１月６日【学校訪問】岡山県立一宮高等学校　いちのみや探究デー（１１月５日～７日)参加
・授業参観５・６限目（２年「音楽Ⅰ」）
７限目（２年「公共」、１年「物基」と「家基」の教科横断型授業）
・研究討議
①STEAM シラバス（どの時期にどの教科でどのような内容を学ぶのかを可視化）
②岡山一宮モデル（探究６段階①気づき②計画③実行④整理⑤考察⑥発表）
授業で必ず段階を位置づける工夫
③ICT の積極的な活用　AI（NotebookLM ,Gemini,Canva）、作曲ソフト(Flat)

〇１１月２６日第１回「学びのデザインラボ＠飛騨高山高校（授業改善に向けた座談会)」参加者６名
テーマ：教科横断型授業と ICT 活用教員の使命はファシリテーターとして能力向上（① AI を教員自身の知識や能力を高めるためのツールとして活用②授業改善に向けた実践の成果や、AI の活用事例について③情報交換の場をカジュアルに設けて共有していくことの重要性)

〇１１月２８日【校内研修】『生成 AI の最新動向と探究学習について』
金沢工業大学 情報理工学部教授 山本 知仁 氏
対象者：全日制 教職員（原則参加）
概要：生成 AI は東大入試を 20 分でほぼ完答 → 大学受験は事実上攻略済み→記憶重視から思考・創造重視へシフト　評価軸：答え探し → 質の高い問いを立てる能力へ教育現場で AI 活用は不可避　教員：校務効率化 → 生徒と向き合う時間確保生徒：個別最適化された学習支援の重要性　活用の成功の鍵はプロンプトエンジニアリング（明確・具体的な指示、役割付与、事例提示）

○１２月１９日【学校訪問】和歌山県立向陽高等学校

・校内見学と授業参観（中学部、高等部（普通科、環境科学科）

・研究討議

①KOYO プロジェクト（気づく力（K）起こす力（O）読む力（Y）教え合う力（O）【HIMAWARI～KOYO‐３S マスタールーブリック】の作成）

②グランドデザインの策定

③探究学習の位置づけを明確化

④向陽ワークショップ、探究型授業・教科横断型授業の実践交流会（教師のレベルアップ）

○１２月２３日第２回「学びのデザインラボ＠飛騨高山高校」参加者３名

テーマ：音楽・数学・英語の教科横断型授業（12 月 11 日実施）の検証と改善、「教科横断的な取り組み」と「教員の意識改革」

① 教科横断による「学びの本質」の追求

②「教師は生徒の鏡」: 教員自身の変容

③ 学校文化の改革と「雑談」の重要性④ 音楽科を事例とした具体的な展開案

今後の課題

教科横断や探究は教員にとって準備負担が大きく、「めんどくさい」「時間がない」といった心理的障壁が強く、自主的に参加する教員が限定される点である。任意参加の学びのデザインラボも参加者が増えにくく、成功例の共有や学びの可視化が不足している。評価基準（ルーブリック）の策定と運用、教員間の評価誤差調整（モデレーション）にも課題があり、探究の質を安定して評価する基盤がまだ弱い。今後の方向性として、①小さく試せる教科横断ユニットのテンプレート化（設計シート・評価基準・教材の共準備）②短時間で参加できるミニ研修導入③評価モデレーションの定例化による評価の信頼性確保④AI を活用した授業準備・教材化・振り返り支援による負担軽減⑤実践を称賛し共有する校内文化の醸成を重点的に進める。特に、教員の「やってみよう」を引き出すための環境づくり（参加メリットの明確化・成功例の体系化）は最重要である。これらを通じて、教員が自ら学び続け、多様な教科がつながる“学びのデザイン”が校内で循環することを目指す。探究的な学びと教科横断の実践は、生徒の思考力・創造力・協働性を伸ばすだけでなく、教員自身の専門性の再構築にもつながる。本事業で得た知見を、次年度の授業改善・カリキュラム設計・校内研修に継続的に還元していきたい。